

浄土 第64巻第2号(毎月1回1日発行)平成10年2月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly
JODO

1998 February

2



法然上人鑽仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎0088-82(無料)または0120-0088-82(無料)〔受付時間〕9:00~23:00(年中無休)〔インターネットホームページ〕<http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

祿名寺

函館

寺院紀行

撮影 ● 夕力才力邦彦

祿名寺





称名寺本堂

本堂わきに立つ土方歳三
と新撰組隊士の供養碑



北海道最古の石碑とそれを
印行した絵図。阿弥陀経曼
陀羅が固かれている



二門の向こうには函館トックが見える



函館 称名寺

称名寺のある函館山付近は
坂の街だ

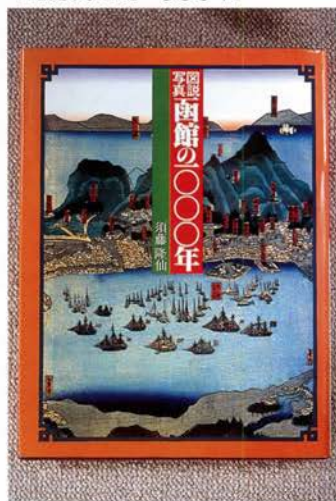


函館名物といえは何といつても夜景だ



明治四十年の火災で焼失する前の
称名寺納骨塔。現在も本堂裏
にその跡が残っている

称名寺第二十四世須藤隆仙住職著の
『図説写真 函館一〇〇〇年』



称名寺第二十四世須藤隆仙住職

浄土

1998/2月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「称名寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
巻頭特別インタビュー①心の交流	成田有恒	8
表紙は語る	川井 聡	19
法然上人と私	谷崎隆光	20
寺院紀行 函館「称名寺」	真山 剛	26
御法語に聴く		36
コラム 若和尚のちょっといい話		41
仏教相談	大室了皓	42
ホットアングル	利根川 裕	46
コラム なんか変だな		41
うまい野菜と料理の話	我田 大	52
Jフォーラム		59
事務局便り		69
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆親下
 表紙撮影＝川井 聡
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

心の交流

オーストラリア慰霊法要

新春特別インタビュー

選沢本願念仏集奉戴八百年の年を迎えて

浄土宗宗務総長

成田有恒師に聞く①

【聞き手】
本誌顧問

大室了皓

■ 本日はお忙しいところを有難うございます。

昨年の暮れにはオーストラリアへ慰霊法要に行かれたということですが、これは浄土宗として初めてのことがかかっております。大変ハードなスケジュールだったそうで、お疲れとは思いますが、まず、そのオーストラリアのお話からうかがいたいですか。

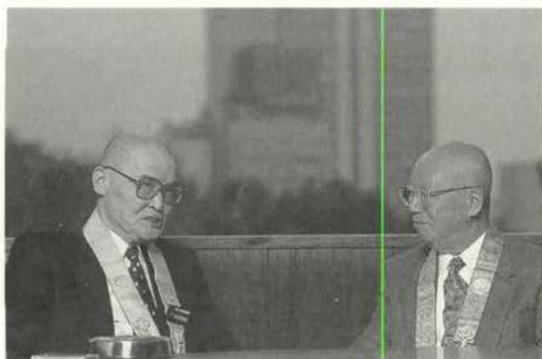
成田 移動が大変でしたね。バスに乗ったり飛行機を乗り換えたり、船にも乗りましたから。

そうですね。オーストラリアには二十六カ所二五二一の日本人墓地が確認されています。今回はそのうちの二カ所、ニューサウスウェールズ州のカウラとクインズランド州の木曜島の日本人墓地へ行きました。宗の代表二十四名で行きまして、それぞれ団体参拝したわけです。

一番驚いたのはカウラです。これは東海岸側からちよつと内陸部にはいった牧草地の中にある小さな町なんです。人口一万人にも満たない小さな町なんです。そこにジャパニーズガーデンという広大な素晴らしい庭園があつて、そこに日本人墓地があるんです。

■ ほか、庭園になつてゐるんですか。

成田 そう、日本でいう公園墓地みたいな感じです。そこに約六百人の日本人が埋葬されているんです。しかも、しかもですよ。この



撮影●小堀祐二

カウラ町には一人の日本人も住んでいないんです。

■ えっ、一人の日本人もいないんですか。それなのに日本人墓地があるんですか？

成田 そう。それでこの墓地を誰が護っていると思いますか。カウラの町が護っているんです。ね、驚きでしょ。なぜ町で護っているんだろう。それが私にはわからなかった。で、ご回向しようとその墓地へいったら、町長と周辺の小学校から三十人ほどの子供たちが先生とともに待っていて法要に列席してくれたんです。

■ それはまた奇特なことですね。

成田 我々の衣を珍しそうに見ていましたが、これ全部豪州人です。で、どういう人がこのお墓に入っているのかというと、太平洋戦争中にね、ここには捕虜収容所があった。このカウラに。そこから脱走した人が眠っているんです。兵士やその時の在留邦人ですね。それをカウラの町の人々が護ってきたわけです。なぜか。

法要の後、町長さんやその子供たちと食事会をしたんですが、その時、ある一人のお年寄りが私の隣に座りましていろいろ話をしたんです。なんと、この人、脱走事件があった時の町長だったんですよ。それで分かりました。すべての意味が……。

■ ほう、奇遇ですね。



成田 本当にそう思いました。もうだいぶいい年齢なんです、この人の言うことには、昭和十九年の八月五日、収容所から日本人捕虜の集団脱走がおきた。そして多くの死者が出た。彼はこの後、すぐに国際法を調べたというんです。するとね、捕虜には脱走する権利がある、とあるんだと。戦時捕虜にはね。だから殺してはいけないと思ったそうなんです。殺したことは誤りだったと思った。豪州の過ちだった、と。だからカウラは町をあげて、この過ちにたいして償いをしなければならない、と。

それが、いまの広大な公園墓地なんです。日本人が一人も住んでいなくても、実に立派に墓地全体を町で護っているんです。そして、現在ここに二千本の桜を植える事業が進んでいて、我々もひとり一本、計二十四本を贈ってきました。でも、これもよくある植樹と違って、一本にひとりの子供がつくんです。

■ 子供がつく、といいますと？

成田 その桜一本を、ひとりの子供が面倒をみるんです。

■ ほほお。そりやまた面白いです。

成田 そうなんです。すでに植樹されている桜を見ますと、その根元に贈った人の名前と面倒をみる子の名前が入ったプレートが置いてあるんです。子供たちの教育のためにもすばらしいことであり、

また、なかなかの町だと思いましたね。

■ いや、本当にすばらしいことですよ。

成田 こういうところは、まあ、宗教の違いなども越えて、何か人間の基本的な理念であり、普遍的な精神に通じると思いましたね。感激しましたよ。

また食事会の時なんですが、子供たちが合唱をしてくれましてね。それで私たちも、黙っているわけにはいかないと、浄土宗の宗歌でもある「月かげ」を歌いました。六、七〇のおじいさんがですよ。そしたら子供たちやその先生方が喜ぶやらびっくりするやら。

■ びっくり？

成田 そう、びっくりしたんです。いい声をしているって。

■ はは、そりやそうですね。いくらおじいさんとはいえ、日頃からお経できたえた声ですから、いいのは当たり前ですよ。そうですね、うですか、声を褒められましたか、それはよかったですね。

成田 いや、うれしかったですよ。

それから木曜島。ここはオーストラリアの最北端にありまして、赤道に近いんです。シドニーからケアンズへ行って、そこで飛行機を小さなやつに乗り換えて、木曜島の隣の島へ、そして船で渡っていったんです。ここには七百ほどの日本人墓地がありました。



■ そこもきれいな墓地になっっているんですか？

成田 いえいえ、ここはちよとひどいですね。小高い丘の斜面の雑草の中に墓石が点々としている、といったらいいてしょうか。

■ 島は大きいのですか？

成田 周囲七、八キロ程度の小さな島です。

■ なんだってそんな島に日本人が？

成田 真珠やボタンの材料となる白蝶貝、黒蝶貝などを採りにいったんです。その貝をイギリスに送ってボタンにして世界中に売っていたんです。潜水病とか、事故、また、風土病などがその死因の大多数ということです。これは、明治の中頃から昭和の大戦のころまで行っていて、和歌山と愛媛の人が多かったですね。建っている墓石も日本から運んだといえますから、当時は日本とかなりの交通があったんでしょうね。でも、いまは行くのが大変。

■ そこで、やはり回向をしたんですね。

成田 はい。でも、これは私だけではないと思いますが、点在する墓地を見ていて、何かさみしくなりました。日本から忘れられ、また、土地の人からも関心を持たれていない、といった感じがするんです。墓地全体が荒れていて、本当にさみしく悲しくなりました。

■ カウラのようにはいかない、と。

木曜島の墓地



カウツでの法要



カウツで少年たちと



成田 はい。木曜島が護っているわけではありませんからね。だいたい、木曜島は住民も数百人っていうくらい少ないですし、島で面倒をみようと思っても無理ではないでしょうかね。でも、この木曜島の隣に金曜島という島があるんですが、そこに九州出身の青年がいて、真珠の養殖をしているんです。彼がときどき見に来ているようです。その彼が我々を案内してくれたんです。

■ そんなに荒れているんでは、訪れる日本人も少ないんじゃないかね。

成田 そう思いますよ。その墓地には何年か前に電力会社の人に来て、慰霊碑が建てられていましたが、我々のように団体で慰霊法要に来たのは初めてということでした。なんとかしてやりたいとは思いますが、手をつけるのはちょっと大変でしょうね。

■ そうですか。カウラのようにはいきそうもないですか。

成田 無理でしょうね。

オーストラリア慰霊法要の旅の話は、まあ、だいたいそういうところですね。

この旅は選択本願念仏集奉載八百年記念事業のひとつとして、また、昨年が日本とオーストラリアの修好百周年ということもあって実現したんですが、もうひとつ目的があったんです。それは開教と

いうことなんです。

現在、オーストラリアは日本の若者たちにリゾート地として人気があります。それだけではないんです。日本で働いて定年を迎えた人がオーストラリアへ移住して暮らしている人がけっこういるんです。そういう人たちの中からお寺がほしいという声があがっているんです。で、どの程度の可能性があるか、ということを見る旅でもあつたんです。ブリスベーンでは現地の邦人と昼食会をもって、いろいろと話をききました。

■ で、どうなんですか。

成田 いますぐ、というのはちょっと無理ではないかと思っています。でも、開教というのは、お寺を建てて活動するということだけでは、ないと思うんです。今回の旅でも感じたんですが、慰霊法要を行ったり、現地邦人と交流会を行ったりして、じっくり、そしてあわてずにお念仏のみ教えをその土地の人々に感じさせていく。そして、その実がみのつてきたところでお寺を建ててもいいんじゃないか、そんなふうにも思うんです。

■ あわててお寺を建てても、維持費などがけっこうかかりますからね。その考えは大切なことだと思えます。

ところで、浄土の読者のためにおうかがいしますが、木曜島とい

うところは、いまのお話では、なかなか観光のついでにちよこつと行くというわけにはいきそうありませんが、カウラのほうは行けそうですか。

成田 行けると思いますよ。シドニーからバスで三、四時間ですから、そんなに遠くはありません。ですからシドニーまで行って、カウラの墓地进行参拝して、それから人気のゴールド・コーストに行くとか、充分に観光のルートの中に入ると思えますよ。ジャパニーズガーデンもきれいですし、町役場というか、そういう建物の真ん前に「平和の鐘」と称する日本の梵鐘まであります。そして、町そのものもきれいで、人々も優しい。

■ それほどの町なのに、日本の旅行社の案内書にはカウラのことには乗っていませんね。

成田 そうですね。たしかに見たことはありませんね。私もこの旅で初めて知ったんですから。不思議ですね。町全体が自分たちの過ちの償いとして、歴代の町長さんをはじめとして、人々がしっかりと受け継いでいるんですから。こういう町を日本は無視してはいけません。

■ いや、本当にそう思います。法をおかしたことへの償いを町ぐるみでやっている。なかなかできることではありませんね。

成田 やっぱり戦時中のことで、みんな感情的になっていた、と。



これは例の町長さんも言っていました。マレーシアやビルマでオーストラリア兵がひどい扱いを受けたという事例への報復ということもあつたのだ、と。そこは正直に話してくれました。けれども、我々は法をおかした、この償いはしなければならぬ、と言うのです。法律のことも考えさせられましたね。法律は目先の利益を律するものではない。我々は法律を頼つてはいるが、ある意味では軽んじている。法律というとテクニク論にかたよつていてのではないか、と思うんです。しかし、カウラの人たちは、そう考えない。一種、英国的なジェントルマン・シップなのでしょうが、なかなかできることではありませんね。偉いと思います。

■ 私たち日本人も学ばねばなりませんね。

成田 はい。私もこの旅に行つて、本当によかつたと思っています。みなさんにもぜひ行つていただきたいと思います。浄土宗の東京事務所にご連絡いただければ、少しはご紹介できると思いますよ。

(次号につづく)

表紙は語る

車窓から

写真と文

川井 聡

月

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の向うに
輝いていたひとり
ひとつの人生

函館本線 函館行き 普通列車

札幌〜小樽間で撮影

蒸気機関車が消えたあとも、汽車は冬場の暖房をスチームでやっていました。そのために最新型のディーゼル機関車も電気機関車もその胴体に大きな釜を持って、わざわざ蒸気を作っていたのです。

普段は出発前に管にスチームを通して車内を暖めておくのですが、昼間暖かく、夜になって急に冷えた日などには走ってる最中に、暖房を始めることもありました。そういうときは冷えきった管が急に暖まって延びるので、床下はごんごんがらがん、すごい音がして、居眠りなんかしてられません。

寒いはずの冬の夜も、こうして湯気が上がっているだけで、ずいぶん暖かく見えて何度となく撮影の題材にしたものです。

いま列車の暖房は、すべて電気です。

かわい さとし 大阪生まれ。小学校の頃の「SLブーム」にはまりカメラを手にする。現在は、週・月刊誌などで人物から商品まで幅広く活動中。

法然上人と私

谷崎隆光

一、仏との出会い

私の両親は極めて仲が悪かった。世の中にこんな仲の悪い夫婦がいるのかと思うくらい仲が悪かった。父親は三十半ばで病気で倒れ、私が二十歳のとき五十歳で亡くなった。その二十年間、毎日一緒に居ながら、ただの一度も父と母がにこにこして笑って話し合っている姿を見たことがない。

ある日、小学校から帰るといつもより大きい声で言い争っていた。そつと玄関の側にカバンを置いて遊びに行った。夕方近くになって、もうそろそろ終わっているだろうと思って、帰ってみると昼間よりもっと激しく争っていた。そつとそのまま家の前を外れて、少し離れているお寺の境内にいった。しかし、日は暮れてもう誰もいない。ところが、どう

した訳か、いつもすっかり閉められている本堂の入口の大きな木戸が、全部開け放ってあった。そして、御本尊様の前の大きな和蠟燭が、ポツポツと勢い良く燃えていた。その時初めて本堂の中を見たのだった。金色に輝く仏様が、和蠟燭の明かりに揺れて、ゆらゆらと動いてみえた。驚きと感動で、ジーつと見つめていると、まるで「おいで、おいで」と呼んでおられるように感じた。どれだけの時間見つけ続けていたのだろう。もうあたりは真っ暗になっていた。しかし、不思議な暖かさ、安心感のようなものに満たされていた。我にかえって急いで家に帰り、夕飯も食べないで布団にもぐり込んだ。そして、先ほどの光景を思い浮かべながら眠りに落ちた。

何かしら暖かいものを感じたその時以来、何か困ったことがあったり、行きづまったりすると、ふつとそれが頭の中に浮かんでくる。

私に「一言で仏様とはどんな方か。」と聞かれれば、迷わず「無条件にあたたかいもの。」と答える。

それ以来、あのあたたかい仏様のもとで暮らしたい、お坊さんになりたい、お寺の前に放つてくれないかと願っていた。しかし、放られる事もなく義務教育を終えるまで親元で暮らした。それからとはかく自分で生きていく、人より一生懸命やれば何とかなるという希望だけで頑張った。人並みに、高校、大学を卒業して、結婚もして子供も授かった。自分なりに努力をしたつもりだった。しかし、人一倍努力しているという自分の思いとは裏腹に、喜びや、満足感や、幸福感というようなものを感じられなかった。やればやるほど、せかされるような淋しいような、腹の立つようなこんな思いをしている原因はいったい何なのか。或る時、家族の言葉で、はっと、気づかさ

れた。それは、自分はこんなに努力しているのにお前たちはしていない、自分の言ったり、したりすることは正しいという、自負心で相手を攻めている愚かな者だと気がついたのだ。自分が最もなりたくなかった父と同じ生き方ではないかと愕然とした。このまま一生過すことはできない。と大声で叫びたいような気持ちになった。そして思い浮かんだのは子供の時見たあの仏様だった。

二、浄土宗との出会い

二十九歳の時、自分というものを根こそぎ見直して、洗い直したいという思いで坊さんになる決心をした。いろいろなお坊さんに頼んだが全部断わられた。それで勝手に頭を刺って会社へ行っていた。そんな時ある方が「お前さんはお坊さんか。」と聞くので「いや、坊

さんではないけど、坊さんになりたい一心で勝手に刺ったのです。」「へー」といいながら何か月も経ってから、またその方が同じことを聞いた。そして「まだ気は変わらないのか。」「はい絶対変わりません。」「じゃお前何宗の坊さんになりたいのか。」「いや宗旨は問いません。お坊さんになれば何かしら見つけることができないのではないかと思っていますんです。」「浄土宗だったら、心当たりはあるがそれでも良いか。」「もう何宗でも結構です。お願いします。すると、その場で電話をかけてくださった。」「じつはこんなやつがいるんだが頼めないだろうか。」「お前が推薦するというのなら、引き受けよう。しかし、東京から九州までは遠すぎるから、書類だけ送りなさい。こちらから本山へ出しておこう。」と、あっさり入門を許して頂いた。その時に「一言いつておくが、わしの生きているうちに資格を取っ

てくれ。それから、お前のような年令で、家族持ちにはいい寺にはご縁がないだろう。今から一生懸命勉強して、法然上人のみ教えを伝えさせて頂く、布教の仕事が一番良いと思う。頑張れよ。」「はい、必ずそうさせて頂きます。」「これが結局師匠の遺言となった。

二年後、知恩院で行を終え、約束通り資格を取らせて頂いた。加行が終わってすぐに、知恩院の前から電話でご報告とお礼を申し上げた。すると師匠は「ああ、良かったな。一遍遊びに来い。」と言って下さった。しかし、私の行が終わってすぐに安心されたかのように遷化された。この娑婆でただ一回きりしかお目にかかれなかった。まさに一期一会のご縁だった。申し訳のないことをしたといつも思っている。そして、「法然上人の御教えを伝えられるような勉強をしてくれ。」と言う師匠の言葉が私の生涯の課題であり、師匠への恩

返してある。

三、法然上人の御教え (選択本願念仏のみ教え) との出会い

得度以前から仏法に関心を持ち、書物、ラジオ、テレビ、等で自分なりに勉強をしていたが、どの本を読んでも、誰のお話を聞いてもほとんど中味は同じだった。それは「自分の力で生きてるように思っているが、そうではない。大きな大きな力によって生かされる。沢山の人のお陰によって生かされているのであると、手を合わせ感謝し、南無阿弥陀仏と唱えさせて頂くのである。」というような書物が随分多かった。ほかの御宗旨の本を拝見しても似たり寄ったりだ。お陰様を喜んで手を

合わせていくということは確かに大切なことではある。尊いお陰様の中に生かされているこの私であることは間違いない。しかしそのことだけであったなら、日蓮宗でも、浄土真宗でも、天台宗でも、禅宗でも、キリスト教でもすべて同じである。お陰様をわからせて頂くということは、全部の宗旨に共通である。

しかし、己の姿を顧みれば顧みる程この教えだけでは足りないという絶望にも近い思いが残るのだった。その尊いお陰さえも踏みにじって、壊してしまい兼ねないこの私ではないか。こんな恐ろしいことを思い、口で言い、体で行うこの私である。いくらきれいな言ってもごまかすことのできない私がいる。こんな私が心底納得できる教えはないのだろうかといつも思っていた。

ところが、仏教大学の通信教育で学び、法然上人の教えに触れて、目から鱗が落ちる思

이었다。阿弥陀仏の本願は、こんな私のために建てられたのだ。と、初めて気づいた。

阿弥陀仏の本願は、お陰を喜ぶことでもなく、宇宙の大生命を悟ることでもない。こんな私を救い取ろうとして、永い永い修行の果てに仏となり、西方に極楽浄土を建て、南無阿弥陀仏と我が名を呼べば、必ず救い取るという事に尽きるのだ。

お念仏の教えに出会って、「絶対的な味方」を得たという安心と、心強さに満たされた。

法然上人様が、八百年ほど前、命がけて御説をだされた本願の念仏には、これでなければならぬ理由があった。それを忘れて、今私たちは尊いお陰の中に生かされていると言っただけで納得しきつては、この世の中を本当に渡りきる力強い教えにはならない。学問を積んだから偉いのでない。自分自身をどれ程見つめ、それに懺悔することができるかとい

うことが、大切なのだ。私どもは今お陰様を骨身に染みて知ると同時に、それさえも踏みにじるこの私であると言うことに、もつともっと深く思いをいたさなければならぬ。そして、南無阿弥陀仏と唱えながら、素直に法然上人の教えを頂き、弥陀の本願に照らされ、迎え摂られていくのだと信じて、この娑婆を心強く安心して生きていきたいものである。

南無阿弥陀仏

(金沢・覺源寺住職)

寺院紀行

函館

称名寺



文／真山剛
撮影／タカ才力邦彦

寺院紀行で全国を取材していると、ほとんど必ずといってよいほど城を巡ることになる。寺あるところ城あり、でこのシリーズの主役が寺なら城は名脇役といったところだ。

しかし寺院も火災や廃仏毀釈などで往年の姿を今に残すことは少ないが、城も同様に戦乱、廃藩置県、戦争などでその姿を今に残すことは寺以上に稀といつていい。それだけに、復元でない昔のままの天守閣などとさくと、何やら心ときめくのだが、今回の取材では城という形態になる前の「館」に出会うことができた。

「館」という字は一般的には「かん」とか「やかた」と読む。だが、この場合は「たて」とか「たち」と読み、敵の攻撃から守る土塁のとりでで、城の原型である。この館がほぼそのままでの形で北海道の函館市志海苔（しのり）に残っている。右下の写真がその土塁の跡で、函館市の中心部から九キロメートル離れた標高二十五メートルの海岸段丘にその姿を留めている。

この志苔館（しのりたて）は今の群馬県、上野国（こうずけのくに）から来た小林太郎左衛門良景が居住していた館で東西約百五十三メートル、南北百十三メートルの広さがある。昆布が名産の漁港の高台に作られたこの館からの眺望はとても良い。写真の土塁の向こうに見えるのが十キロメートル近く離れている函館山だ。



◀函館の地名の元となる宇須岸館の想像図
▼現在も残る志苔館跡。遠く見えるのが函館の中心部、函館山



さて、函館だが、実は江戸時代までは箱館と呼ばれていた。そう函館にも宇須岸館という館があり、その館の形が箱のような形をしていたからである。多くの地名がアイヌ語を語源とする北海道でこの函館は数少ない例外のひとつである。

北海道の歴史は本州に比べるととても短く、全道の本格的な開拓は、明治以降である。それまではアイヌの土地であった。この北海道へ本州からの和人が渡来してきた時期については諸説があり定かではないが、鎌倉、室町という武士の時代に流人や、本州を追われた豪族、あるいは一攫千金を夢見る山師などが渡り、館をつくったのである。函館は通商で栄えた江差や藩の置かれた松前について開けたところである。

こうした函館の歴史を知るのに恰好の本がある。イラストや写真をふんだんに使った『図説写真 函館の一〇〇〇年』というA四版ハードカバーの本だ。

著者は須藤隆仙。そう函館称名寺の第二十四世住職である。

須藤住職は郷土史家として有名で、仏教関係の書物を含め函館の歴史に関する著書が三十冊を越えている。辞典類などの一部執筆も数に入ると百冊はくだらないに違いない。

『随想はこだて散歩』での「ご住職の趣味は？」という質問に



北海道第一歩の地として碑が立てられている東浜棧橋

「朝から晩まで、暇があれば、原稿書きに追われて、趣味と名づけられるものに手を出す余裕は、全くなし」と答えているぐらいである。浄土宗にはペンネーム寺内大吉で直木賞を受賞した成田有恒事務総長をはじめ『新現代日本執筆者大辞典』に名を連ねる僧侶が何人かいるが、須藤住職もその一人だ。

とはいえ須藤住職はいわゆる物書きというだけではない。南北海道や函館の歴史や文化財の様々な委員に就き、かつ実務に携わる行動家なのである。地元の観光バスガイドやタクシー運転手を対象にした講演や観光案内の研修をしたり、観光名所である元町を中心とする二十もある坂の案内文や市内の名所説明文などを書いている。

幸い取材日は天気恵まれ、住職自らの案内で函館市内の名所を回らせていただいたが、船魂神社、石川啄木一族の墓、元町の教会、新島襄海外渡航の地（新島襄は同志社大学創始者、北海道第一歩の地、五稜郭など、行く先々の看板の多くが須藤住職の書かれた案内文や説明文だった。

昼の観光案内のあとに夜の函館も案内いただいた。須藤住職行きつけのお店だが、どの店でも「先生」、「和尚さん」とこれまた大変なものである。昼夜、公私ともども地元で溶け込んでいる。

須藤住職は昭和四年、函館市郊外上磯町の食品店の十人兄弟の次



函館山山腹にある船魂（ふなだま）神社（奥）は融通念仏宗を広めた良忍上人が建てた観音堂がその始まりといわれている

称名寺寺宝の円空上人作の観音像



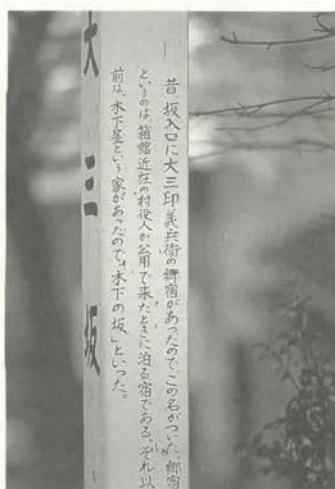
寺宝の四天王も観音像と一緒に宝物室に奉られている



男として生まれた。母親の反対はあったものの、称名寺の末寺であった菩提寺の住職の勧めで小学校六年の時から称名寺に弟子入り。第二十一世の小川隆誠住職の時代で当時四人いた弟子のうち三人が逃げ出した直後だったという。なぜ、逃げ出したのかという理由はわからないが、そうした時に須藤少年は称名寺に入ることになる。現在は檀家を末寺に移したことで、往年の三分の一弱になっているが、昔は十八の末寺を有し、檀家数が四千を超える本寺だっただけに、寺の仕事をこなすにも住職一人ではとても無理で、十人の僧侶と何人かの弟子が必要だった。それゆえ、末寺の住職の紹介でそんな弟子入りとなったという。

第二十二世の鳥居正語住職時代には函館から四〇〜五〇キロメートル離れた森という所に入ることになる。水道も通っていない寺で、朝の勤行の後はず水汲みという毎日だったという。七飯（ななえ）というちょうど函館と森の間にある町の町長の娘さんを嫁にもらったばかりで、その奥さんと一緒に天秤棒にバケツをぶら下げ、数百メートル離れた小学校の水道まで歩いたというから、北海道の南の玄関、函館の恵まれた環境とは大いに違う生活だった。だが、今となつては懐かしい思い出もあり、また、この寺での五年の歲月がいろいろな意味で須藤住職の血となり肉となつていくという。

須藤住職が書いた板の案内。全部で二十ある



そうした生活の後、第二十三世の武藤善友住職の時に再び函館にもどり、第二十四世として称名寺の法灯を継ぐことになる。一日、二日のインタビュでは知る由もないが、色々な事情があったに違いない。そして、こうした経歴を持つだけに須藤住職には普通の僧侶以上の魅力があるのだろう。

さて、その須藤住職の預かる称名寺だが、正式名称を「護念山撰取院称名寺」といい、北海道を代表する浄土宗寺院である。創建は正保元年（一六四四）、開山は伊勢の国からきた円龍上人で、現在ある函館山の山腹ではなく、五稜郭駅の近くの亀田という所に阿弥陀庵を建立したのが称名寺の始まりである。その後、宝永五年（一七〇八）に函館山に移転するまで、この亀田にあった。

さて建立当時は三代將軍家光の頃で、キリシタン禁制のために家という家は必ず寺の檀家とさせられ、同時に寺も必ず本寺を持ち、その本寺もまた本山に属させるという中央集権的な檀家制度確立の最中であつた。それゆえ、阿弥陀庵も本寺を持つこととなり、当時南北海道の行政の中心であり、城もあつた松前の光善寺を本寺とした。しかし、江戸後期には箱館を松前藩から取り上げ直轄としたため、松前の寺の権限が及ぶ範囲は本古内までとなり、箱館の中で本末制度を組むこととなった。そして称名寺、曹洞宗の高龍寺などが本寺

同志社大学の前身である同志社英学校の創設者、
新島襄の船外渡航の地



となり、いくつかの末寺を持ったのである。

前述したように須藤住職は函館の歴史や文化に造詣が深いが、称名寺の歴史を繙いていくと、確かに函館の歴史や文化につながって来る。それだけ称名寺は函館との結び付きが強いのである。

境内の庭園奥にある石碑は北海道最古のもので、貞治(じょうじ)の碑と呼ばれ、阿弥陀さまを拝む絵と阿弥陀さまが迎えにくる絵が彫られている。これは浄土教のものであり、かつ貞治六年(一二六七)の年号が刻まれていることから、和人史の始めとその念仏信仰が広まっていたことを今に伝える重要な石碑として、北海道の有形文化財に指定されている。

また境内には、毎日お参りの人が絶えない土方歳三と新撰組隊士の供養碑、伊予(愛媛)出身で箱館に居住していた河野加賀守政通の供養碑、淡路島出身で回船問屋として一代で財をなし、日露間の交渉でも活躍した高田屋嘉兵衛一族の墓などが並ぶ。ユニークなところでは第二次世界大戦の函館空襲での戦災者慰霊碑だ。

敗戦直前の七月十四、十五日に称名寺のある船見町をはじめ市内の約四百戸が焼失、多くの死傷者を出した。その慰霊碑の横に並んで、撃墜され戦死したアメリカ兵の慰霊碑があるのである。慰霊碑自体は珍しいものではないが、敵味方の慰霊碑が並んでいるのは珍

函館戦争の舞台となった五稜郭は
当時珍しい洋風城郭だった



しい。それだけに平成元年に建てられたこの慰霊碑はアメリカの新聞にも紹介されたという。

また、寺宝としては円空上人作の観音像、函館市指定有形文化財の藤原時代作十一面観音菩薩像、桃山時代の四天王像などがあり、寺宝室に並んでいる。こうして残ったものとはともかく、残念ながら度重なる火災で焼失してしまったものも少なくない。

とういのも火事は函館の名物と言われるぐらいで、明治初年から大正十年までのおよそ五十年間に百戸以上が被害にあった火災が二十五回も起きている。

称名寺も例にもれず、明治中期に三回も類焼している。明治十二年の大火で、かつて奉行交代時の仮本陣や諸外国の領事館になった函館一の伽藍が焼失、そして明治十四年には現在地に移転する。しかし、明治二十九年には再建した庫裡、三門が類焼、そして明治四十年には前年の明治三十九年に完成したばかりの大本堂、庫裡、納骨堂、鐘楼堂が一年もせずして灰塵に帰ってしまった。

当時の吉水定穩住職はそのショックのあまり、思わず火中に飛び込もうとし、まわりの人々がようやく引き留めたというエピソードがある。こうしたことから称名寺の本堂は不燃質の材料で作られることになった。昭和四年に竣工した本堂は、間口十二間、奥行十七



称名寺境内。右手前が三門、中央が客殿、左が本堂



「誠実」日本を目指す
和顔愛語の
和顔堂

◆ 営業品目 ◆

寺院専用各種記念品・慶弔用品
御布施用品・お供物品
その他寺院用品全般
結婚式引き出物・香典返し用品
企業及び商店PR用品
販売促進品・ギフト用品全般
名入れ・包装・のし掛け

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-14-14
株式会社 **和顔堂**
みなみ供養が一番
TEL 03-3794-1100 (代)
FAX 03-3794-1107
0120-7676-00 札

間という大本堂でその前後に書院、位牌堂、観音堂なども作られた。そして平成六年の創立三百五十年の記念法要にあわせ、庫裡を改築し現在に至っている。

北の玄関として下田とともに開港された函館には、諸外国関連の名所が数多い。そうした観光名所とともに歴史ある称名寺も函館の一名所として果たす役割も少なくない。そして、それを一番良く知っているのは称名寺第二十四世、須藤隆仙住職なのである。

(ルポライター)

御法語に聴く

ある時又の給わく、あわれこのたびしおおせばやなと。
その時乗願^{じようがん}申さく、上人だにもかように不定^{ふじよう}げなるお
おせの候^{そうら}わんには、ましてその余の人はいか^{れん}が候べき
と。その時上人うちわらいての給わく、蓮台^{れんだい}にのらん
までは、いかでかこのおもいはたえ候べきと。

『乗願上人伝説の詞』

ある時、法然上人が申された。「今度こそはしかと（往生淨土を）遂げたいもの
よのう」。それを聞いた乗願上人が言った。「お上人ともあろうお方がそのよ
うに不安^{ふあん}げなことをおっしゃつては、他の者どもはどうしたらよいのでし
ょうか」。すると法然上人は、声を上げて笑いながらお答えになった。「命尽きて
極樂の蓮の台に登るまでは、どうしてこの思いが断ち切れようぞ」。

心配いらぬ

不安である。

「絶対大丈夫」と、たとえどんなに太鼓判を押されたとしても、何事につけ「本当にそうだろうか」と思い悩み、疑ってかかり、フラつく足もとを押さえきれないのが我々人間の弱さであり、赤裸々な姿であろう。自分自身でもつかめ得ないほどの細さは、風になびく柳に勝るとも劣りはしない。

事が重大であればあるほど、そうしる思いは余計に募ってくるものだ。もつとも、この世で「絶対大丈夫」なる事が、どれほどあるかはわからないが。

どうだろう。まして、こと自らの死についてとなれば、不安は最大である。

法然上人が、多くの弟子達や信者に対して常々説き聞かせていたのは、いうまでもなく、称名念仏で浄土への往生が叶うのは間違いない、なぜならば阿弥陀仏が本願に誓われたことであるのだから、そしてそれを、

あらゆる諸仏、菩薩が証明されているのだから、ということであり、それを素直に固く信じて念仏一行に励むように、ということのはずであった。

「往生は不定に思えば不定なり。一定と思えば一定する事なり」
いちじょう

「往生決定の心を失う事なかれ」

こうした力強い言葉が、随所に散見出来るとおりである。

「それなのに……」

冒頭に掲げた法語を、今一度読み、そして味わってみたい。そのシーンを刻銘にイメージしながら。

法然上人より三十歳以上も若い乗願房宗源にしてみれば、「そんな頼りのないことを言ってくれるな」の思いがあつたであろう。焦りと困惑に覆われた表情が見えるようである。

そんな乗願房の心を知ってか知らずか、はてはそこに垂れた暗雲を払拭しようとされてか、上人から返ってきたのが「うちわらい」。

何ともおかしいではないか。

実におおらかではないか。

いや、そう言つては、今にも上人の衣端にとりすがらんばかりに身を乗り出したであろう、乗願房の貞潔な心に失礼ではあるが。

さて。

それにしても、上人に、思いもよらぬこんな発言があつたと知つては、我々としていささか不安な思いが顔をもたげ来るのを禁じ得ないというものだ。

「法然上人の言葉に矛盾がある？」

そうだろうか。

上人は、一糸まどわぬ人間の現実相を、根底に宿る複雑な「こころ」を、性（さが）を徹底的に凝視された方であつた。

だからこそ、そうした「断ち切れぬ思い」をいかんともすることができなかつたのではなからうか。そして、断ち切れぬことを隠すことなく、弟子にあえて告げたのではなかつたらうか。

弥陀の本願を、救いを疑つていたのでは、もちろんない。

「往生は間違いない。でも本当に往生してみるまでは……」

「鶏と卵」ではないが、どちらが先ともなく巡る心を真綿で包むかのように「いや、大丈夫だ。往生は間違いないのだ。心配いらぬ」との、成就した弥陀の誓いは断固として存するのであり、上人はそれを思い定めていたからこそ「うちわらい」されたと思われるのである。

「おおせば（為し遂げる）やな」。

我々はここに、「凡夫法然」その人の大きさを、人間味をますます感じないわけにはいかない。やがておとずれる弥陀の来迎を楽しみに待ちわびるときめきにも似た鼓動、余裕すら伝わってくる。

そこからまた、柳のごとき、風車のごとき我々の心ではあるが、「安心して」、信を弥陀一仏へ、浄土へと寄せることができるのである。

念仏の教えは、我々が知り及ぶべくもなく広く、深いものらしい。

（小村 正孝）

新しい年が明けてはやくもひと月。また屠蘇（とそ）の酔いから覚めきらないでいるという方はよもやないでしょうか、今年の序盤戦、エンジンの具合はどうですか。それぞれがそれぞれに掲げた目標に向かっての足取りはいかがですか。

えっ、お前はどうか？

鋭意、努力しているつもりではあるんですが、ハイ。

最近、所用でとある他宗のお寺さんを訪ねました。立派な山門をくぐると、すぐに大きな伝道掲示板。目に飛び込んできたのは、毛筆で力強く書かれた「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」という短い言葉でした。

天台宗を開いた伝教大師最澄

若和尚の

三十三其なしはいいトットヨチ

さん。その弟子の光定という方の著書に見られるこの言葉、「向上のためにたゆまず努力を続けられ、おのずと生きていく糧は得られるもの。糧が充たされているからとて、そうした向上心がおこるわけではない」という意味とのことです。

もともと、これは仏道において言われたことですが、どうしてどうして、我々の日々の生活に照らし合わせてみても身がつまされんというものじゃありませんか。ちよつと古いかもしれませんが、ハングリー精神、と言ひ換えられまじうか。

欠けてます、確かに。身の周りの環境を整えることにまず意を払い、「こうなったら頑張ろう」などと誤魔化しが

ち。環境整備にはかり奔走し、ふと気がつけば「アレレ、何をめざしてたんだったっけ？」。

環境や衣食、経済的などの諸条件が無関係とは言いません。でもそれらが「道心」やその結果を直接左右するものかと言い切る自信はありません。

——オイッ、どこまで身勝手なんだ！ コラッ、どこまでずるいんだ！ もつとひたむきになれよ、目をそらさないで正面から向かっていけよ。じゃないとたどり着きやあしないよ——山門をあとにした私の耳奥でいつまでも繰り返されていた、チクリと痛いあの叱咤の声。いったいどこから聞こえてきていたのでしょうか。

(正)

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

豆まきつて
何だろう



毎年、二月三日に「鬼は外、福は内」などと大声で言いながら、有名人の年男や年女にあたる人が神社で豆まきをしています。あの行事は何なのでしょう。

いつごろから始まったのでしょうか。

小さい頃から疑問に思っていたのですが、鬼って何をさすのでしょうか。

いたとしても追い出してしまっているのでしょうか。ほかで悪さをするようなことはないのでしょうか。

父や母は、そんなことはない、と申しておりますが、問題がないとしても、それでは一

年に一度でいいのでしょうか。

また、またあとの豆はどうするのでしょうか。

家では豆を買ってきて、子供といっしょに豆まきをしますが、そのあと主人は豆を食べません。あれは食べるものなのでしょうか。

それから、当日、神社に出かけて行った場合、どういう風にすればいいのでしょうか。

そのことを、お寺ではどんな風に考えられているのでしょうか。お宗旨に関係なく出かけて行ってよいのでしょうか。



節分と豆まき

一、節分とは

現在は節分を「セツブン」と言いますが、昔は「セチブン」が正しいとされていました。季節の別れ時のことです。

ですから、立春・立夏・立秋・立冬の前の日を全て節分と言いました。

それが何時の頃からか、立春に限られるようになり、俗には「年越し」とも称されています。

昔は陰暦ですので、十二月中でしたが現在は概ね二月三日になっています。

二、追儺（ついな）

節分の夜には、追儺の行事が行われてきました。追儺のことを「鬼やらい」、「なやらい」、「鬼走り」、「厄払い」、「厄落とし」、「厄神送り」などと言い、疫鬼を追い払う行事で、人を赤鬼と青鬼に扮装させて、これらを追い払う式などを行いました。

節分は百鬼夜行する時と考えられたからで、これらを追い払って新しい季節を迎えようと

したのです。

もとは中国の行事でしたが、わが国では文武天皇の慶雲三年（七〇六年）から宮中の行事として、十二月晦日の夜、中国の古式に則って行われるようになりました。

後世になって、各地の神社やお寺に広まり、江戸時代になりますと、宮中では廃止されたにもかかわらず、民間では益々盛んになりました。

その中で特に有名になったのは、吉田神社・阿蘇神社・春日神社・成田山新勝寺・京都盧山寺であつたと言われています。

お寺では「節分会」とか「追儺会」といって、その法要は宗派や寺院によって異なりますが、般若心経が唱えられるのが多いようです。

三、豆まき

節分の法要や儀式的後に、豆をまくのも中国にならって、わが国でも応永の頃には行われていたと伝えられています。

江戸時代になりますと、庶民の家でも豆を

まくようになりました。

鬼を追いかうのに豆を使うのは、俗に豆が「魔目」、「魔滅」に通じるところから大豆を打って鬼の目を潰し、魔を滅することが出来るということによるとされています。

庶民の家では、炒った豆を升に入れ、初め表口に立って「鬼は外、福は内」と三度大声を挙げて豆をまき、次に他の出入口から各部屋を台所など順々に、同じ様に叫び豆をまきながら、鬼を払う儀式を行うようになってきました。

一般には「鬼は外、福は内」ですが、「鬼は内、福は内」域は「福は内、鬼も内」と叫ぶ神社やお寺があると聞いています。

豆をまき終わった後は、自分の年だけの豆を食べたり、食べ切れない時は辻に捨てたり、「厄払い、厄払い」と連呼して家々を廻る人によって「厄落とし」をする習慣も、室町時代あたりからあったといえます。

四、お寺でもお宮でも

昔から神社でもお寺でも、広く行われてい

た行事ですから、福を願ってどちらで豆まきをされても差し支えないでしょうし、お宮やお寺へお出かけになれなくとも、ご自分の家で家族そろってなさっても良いのではないのでしょうか。

五、豆を拾ったら、厄を貰うことに

お寺やお宮の「節分」で厄を払うために、年男（女）がまいた豆を拾ったら、その人の厄を貰うことになるのでは、と心配する人があるかもしれません。

しかし、私は「鬼は外」と鬼を追いかうして、「福は内」とまくのですから、拾った人の豆、内に入った豆は「鬼豆」ではなく「福豆」である、ですから「福」を頂くことになるのだと思って、手を差し伸べてその「福豆」を頂くようにしています。

利根川裕のホットアングル

今年は大丈夫、
万事よろしく

利根川
裕

今年の初詣の人が昨年を上回ったそうである。

毎年、マスコミにはベスト3なりベスト5の人数が発表される。明治神宮、成田山新勝寺、川崎大師がご常連である。三百万人前後の人が、それぞれに集まるのだから、この数字には驚かされる。

わたしも初詣でを欠かしたことがない。ただし、ビックな杜寺ではない。わたしの住んでいるすぐ近くに神社があつて、その宮司さんとはふだんから昵懇だから、少々宮司さんへの義理立ての気持ちもないわけではない。除夜の鐘が鳴りだして、やがて日が改まると、お宮で一番太鼓になる。そこですぐに初詣でに駆けつけるのである。それでも行列が出来ている。

この神社でも、やはり例年より人が多かった。それも若い人の数が多かった。ここ数年だんだんと若い人がふえてるように思う。

行列の中の若い女の子が、

「何を祈ればいいの、就職かな、恋人かな」と問うたら、一緒にいた父親らしき人、

「万事よろしく」

と断固といい放った。

これはいい。そこでわたしも、

「万事よろしく」

とお祈りしてきた。

じつは、昨年の初詣では、わたしは拝殿の横で足を滑らせて転んだのであった。人目に立つように派手に転んだわけではなかったのだが、わたし自身少なからず心が傷ついた。

「今年は何かでつまずくんじやないかな」

この一年、そのことを誰にもいわなかったが、内心わたしは、ずうっと気にかけていた。この神社では、境内にテントを張って、商店街の旦那衆が、御神酒と甘酒を振る舞ってくれる。

今年もありがたく御神酒を頂戴していたら、旦那衆が、

「去年は転びましたね」「そうそう、転びまし

したね」

などといった。ちゃんと見ていたのである。そして忘れないでいたのである。

「今年は大丈夫ですね」

とも声をかけてくれた。

この一言で、わたしは悪きものが落ちたように、気分がすうっと晴れあがった。

そして、この旦那衆たちが、この一年、それとなくわたしを見守ってくれていたのかと思うと、ほのぼのとしたものに包まれていた。そこで一句。

初参りおなじ氏子の旦那衆

今年は大丈夫。万事よろしくである。

マスコミ的いかただと、初詣での人のふえたのは不況のしるし、とか。いかにも、神や仏にすがりつきたいほどの不景気風が吹きまくっている。政府がたのみにならないのだから、もう神だのみ、仏だのみである。

これまたマスコミ的見立てだと、不景気のあおりで、海外旅行も国内旅行も見合わせる

人が多くなったし、レストランや小料理屋でうまいものを食うにも、ついつい懐勘定の寒さが気にかかる。となると、もう行くところは初参りしかない、という次第である。

ところで、わたしは初芝居見物に出かけた。三日には、浅草公会堂の若手花形歌舞伎。四日には歌舞伎座の十五代目片岡仁左衛門の襲名公演。五には国立劇場の初春歌舞伎。

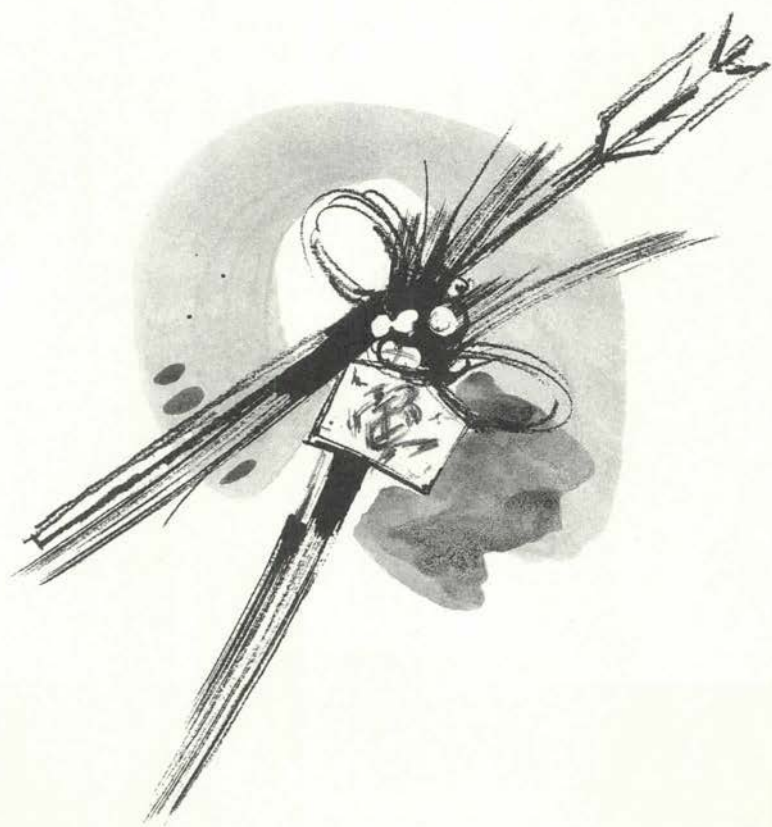
こんな日程も、ほぼ毎年の例だが、今年の浅草寺の賑わいは格別だった。芝居を見る前に浅草寺にお参りして、とかなり早目に家を出たのだが、仲見世通りは動けないほどの人で、行列がなかなか進まない。まわりの人たちも、

「今年はすげえや」

と口々に話し合っている。

このままでは、芝居の開幕に間に合いそうもないので、とうとうわたしは浅草寺の大屋根を仰いだだけで、横道へ入ってしまった。

やっと公会堂へ着いたら、顔見知りの先輩



イラスト・平野 稔

がいて、やはり浅草寺参りは叶わず、

「途中で遥拝ようはいしてきたよ」

とのこと。遥拝、という言葉がおもしろかった。いまだときの人には、遥拝は分るかな。

三つの劇場は、いずれも大入満員。これまた例年以上の熱気で、どこが不景気なの、といわんばかりの熱気である。

とりわけ、歌舞伎座が賑々しい。銀座から歌舞伎座のある築地に行く通りの様子が、もういつもとは違っている。風景が浮きたっている。とてもいった具合だ。

わたしは、戦後五十年あまりの歌舞伎のほぼ七割くらいは見続けてきたし、この間のいくつもの襲名公演も見してきた。

当時、空前といわれた十一代目市川団十郎の大盛況はじめ、襲名公演はめてたい大イベントである。

いくつもの襲名興行の中には、興行者側が無理して仕掛けの笛を吹いたものの、観客がさほど踊らなかつた例もないではなかつた。

が、こんどの仁左衛門襲名は、観客が自然に盛りあげている。みんなが待っていたのである。晴れ着の女性も多い。

初芝居見て来て晴れ着いまだ脱がず 子規
晴れ着を装って晶屑役者のいる初芝居に行くのは、信心する社寺への初詣てに行くのとおなじ気持ちの高ぶりがある。そして、初芝居を見て帰ってきた、この心のときめきをそのまま大切にしまっておきたい。

暗い話題ばかりで明けた正月であるからこそ、今年の初詣で、初芝居に託した思いは深くて切ない。

今年は大丈夫、万事よろしく、である。

(作家)

想 随 篇 掌

正月の三日、総理府から結婚

観に関する世論調査が発表された。それによると、「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」という考え方に「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた人は、全体で五四・二%。男女別では男性五三%、女性五五・一%。

これは独身者、既婚者を分けないで行った数字であろが、二人に一人が「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」と答えていることに驚

かされた。

もちろん、カソリックのように離婚はダメとは思わない。別れねばならない色々な理由が生きていればある。共に暮らすのが互いを不幸にするのなら、別れた方がよいと思う。

でも、でもある。既婚者にとって、離婚は一大事である。友人でも何人かが離婚しているが、子供のこ、また、別れた相手の経済的なこと等いろいろな問題がおこってくる。それは結婚することより大変である。

② 変だな なんか

？ になって結婚

この調査回答を見ると、「：満足できないときは離婚すればよい」とある。結婚生活で夫婦が一〇〇%満足できることなどありはしない。お互いに我慢をしたり、話し合ったりしながら相手を理解し、愛を育てていくものだ。それを満足できなければ、なんて簡単に思ってしまった方がいいのだろうか。

たしか結婚式のときには、神前、仏前、キリストの教会であろうと誓いの言葉があると思う。その誓いって何なんだろう？

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-33355121 68
振替 東京211763372

うまい野菜と



料理の話 ⑬

あるいは

セ
ツ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

こちらでダイコナはダイコンナップともいう、大根の葉のことです。

「大根の葉っぱは栄養があるから捨てないで食べましょう」と、あらためて雑誌などで葉の料理法いろいろが紹介されていたりする。そのあらたまった感覚に違和感があった。そこらをつつくとなんか出てくるような気がした。出ないかもしれないが、いや、捨てるのがもったいないとか、栄養があるからとかに、じゃない……。食品に対する対し方の根本が違うという感じ。大根ばかりというわけじゃないんですが。

食品というと、もうちがう感じがする。感じが多くて恐縮ですが。

自分で育てているのと買って食うののちがいというか。学校と家庭のちがいというか。食品のなかの野菜のなかの大根、その葉っぱの調理法は、といった感覚と、種時いたら芽が出た。それを間引いたのがある、どうする、といった感覚のちがいというか。

と、抽象的なことばかり言ってもダチャカネ（らちがあかない）ので「あらたまらない」田舎のダイコナ食をふりかえってみる。

昔は大根を食おうと思ったら、金もってミセヤに走ればよい、のではなかった。種を蒔いて育てなければならなかった。育てる過程でしぜんに出る「廃棄物」（？）も食うのだった。今、大根といえば店頭のあの白長いのを思い浮かべますが、そういう端的なものとして大根はあるのではなかった。種蒔きから調理、加工までのすべてを自分でする相手としてあったのだった。その途中のもの、もちろん食えないものじゃないから、しぜんに食うのだった。白く太く長いのが一応目的ではあるけれど、途中のものも食えることになっていた。それはその時期にしか味わえないうまさだった。しかしそれは、ほかの青物がなければならなかった。かたなく食う、に近くもあった。……また抽象に流れそうだ。ダイコナだった。

秋蒔きが大根の王道だから（と「あらため

て」いなければならぬほど「旬」の感覚が失われている今のニホンです。八月末頃に種を蒔く。何回かウルノグ（ウロスキ、間引く）。その菜ツパ（ウルノギという。間引き菜）は、味噌汁の実や、煮物のアイグ（とりあわせ）、浅漬などにする。その苦い風味は他をもつて代えがたい。秋を感じさせるものでもある。

成長していくにしたがい、なんだかウルノギ、食う。菜の葉の味の変化を知る。舌も大根の成長を知る。季節も変わっていく。葉がある程度太ると、こんどは根が太くなってくる。その親指かもう少し太くなったのは浅漬けがうまい。辛くて香高い。茄子の塩漬けの漬け汁に漬けたのは青紫に染まり、その香りも移ってまたうまい。ちよつとコーチネー（堅い）のが、菌が悪いムキには残念なところ。このへんで規定の株間に達するのでウルノギは終わる。

こんどは太くなったのからこいで普通の大

根としてつかう。ダイコナもだ。

今このあたりでダイコナの利用法の第一はといえばおそらくアンボのアン用でしょう。といって、すんなりわかつてもらえるかだ。おそらく無理でしょう。

アンボとは何か、アモ、アンモは古語で餅のこと。その一派のことばらしい。ここらに残っている。笹団子なら知っていますよね。あれから笹の葉をとり皮を厚くし、サイズを大きくして、アズキ餡をダイコナの味噌炒めに変えたもの、といえばわかるか。信州あたりではヤキモチといっている、その仲間。

アンボは昔はエリゴ（選んだ後の残った屑米）をコヌカ（米糠）のついたまま挽いて粉にし、それをこねたものらしい。その団子をいきなり囲炉裏の灰にイケて（埋めて）焼き、ばんばんと灰を落としたのが農家の朝食の主食だったという。餡がないからカラアンボともいったらしい。

しかし今は「賢沢になって」（年寄りの言）

大根の
 葉は
 みづかみの
 しろみず



イラスト・平野 稔

精白して糠をとったのを粉にしてつかう。さらにこの上新粉（ウルチ米の粉）も加え口当たりをよくしている。ヨモギや山ゴボウの葉を入れたりもして風味と色を加えてもいる。

それを湯でこねたのを、ちぎってふかし（蒸し）さらにもう一回こねる。ツキツカエジという。ここを電動餅搗機にやらせるのも今はふつうだ。誰が考えたか、うまい工夫だ。茶飲み話ネットワークであつという間に普及したのだろう。手でやるより楽だし、もちもちしこしこ、となる。これで餡を包む。

餡は小豆のこともあるが、アンボといえはダイコナ、というくらいダイコナの味噌炒めが定番だ。それはどうするか。

ダイコナのがワッパ（周りの葉、側葉）は大胆に捨て、芯のほうの柔らかそうなところのみとする。それをさつと茹で、水にさらし、細かく刻む。その水気をよく去り（網袋に入れて絞ったり、洗濯機で脱水をかけたりますともいう）油で炒める。味噌で味つけし水気

のなくなるまで、よくよく炒める。シソのリン（実）や唐辛子の刻んだのも入れるといい。包んだのを、魚焼きや、オーブントースターやホットプレートで焼いて「焼きめ」をつける。（よく「焦げめ」といわれていますが、板前修行の時、つけるのは「焼きめ」ときっちり習った。理由は「焦げたら食えねーだろーが」

というのがアンボだ。こう書くと、捨てるのの寄せ集めみたいだ。けど、けっこういい一品です。このためにダイコナを塩漬けにして保存したり、味付けしたのを冷凍しておく人もいるくらいです。

あと家ではダイコナの糠漬もしておいた。祖母が好きだった。塩を強くして漬けておけば夏を越しても酸っぱくならない。それを細かく刻んだのを飯の上にかけて食っていた、一年中。ものすごくうまいといったものではない。まずくもないが、高菜漬のコーチネー（かたい）ようなものと思ってもらったらい

い。昔の救荒食の類かもしれない。ダイコナも捨てずにとっておくという。

私は、よりうまいダイコナをもとめて今は「方領」という在来種を作っています。菜っ葉用という大根品種も売られますが、方領が名前といい在来種といい、好みます。もちろん葉の味は最高（と思う）。虫や病気もそのことを知っていて、多くつくようです。茎は偏平で、大きい葉は立性でなく横広がりです。しっとりした柔らかい葉は、軽く茹で、ちよつと炒め煮て食つてもうまいです。肩の張つ

た角のような形の大根も、煮て食うとまた独自の味です。

とまあ、種を蒔きとりいれるまで、その時にしぜんにとれるダイコナを、昔ながらのやりかたで料理し食っている。生活の流れのなかに大根やダイコナがくみこまれている。

そういう者からは、忘れられたとか、珍しいとか、なつかしいとか、もったいないとか、栄養とかの文脈で、あらためてダイコナをとりあげるのが不思議に見えたのだろう。切捨

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

てられ普通は流通していないダイコナを、わざわざとりあげることは、またすぐ忘れ去れることとくつついている。と悪口の一つも言いたくなる。

またマニユアル的にダイコナにはこれとこれとこの料理法があります、というかんがえにも違和感があつた。メニユールの集積が料理という世界をつくるというようなの

が。住み込みで板前修行に入つたばかりの頃、料理を覚えなくてはと、試験勉強するように一から十まで暗記しようとした。マニユアル化したファイルを増やせばよいと思つていた。……ただ料理を覚えることとは、そういうことではなかつた。少なくとも肝心なことではなかつた。むしろ幼児がことばを覚えるように覚えるものだつた。その環境に入り、あ

る期間そこで頭や体を動かしていると（日本語をしゃべれるようになるように）料理ができるようになるのだつた。ふだんは意識されず記憶の中に埋もれている料理が、材料にあつたとフツと自動的に出てくるようになるのだつた。その材料を入れかえたり、組合せを変えたりすると、ちがう料理にもなるのだつた。自由に日本語をしゃべるように、自由に料理できるようになるのだつた。

全ての料理マニユアルをためこむことによつて、料理がマスターできるのではなかつた。そんなこと書くも恥ずかしい当たり前だが、自分がしてみたいはわからなかつた。

あらためてダイコナ、への違和感を書いた。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

特別エッセイ

早春賦

大畑 等

クロッカスときめきに似し脈数ふ 波郷

四季の中で、春それも早春は格別である。万象に緊張と勢いを感じる。成程まさに立春は二十四気の第一の気である。肌寒い気候に危ういと思いつつ花芽を見守るのであるが、結局は一番最初の花が色彩やかで大きい。その勢いにこの数年は驚かされている。

君子蘭蟻頭をふりて頂に 楸邨

君子蘭の太い花茎が伸びて来て、リンとした朱色の花を咲かせる様は、まさに、我こそは春だ、と言っているようである。春になつたから咲いたのではない。花でもって春を開示したのだ、という風情である。

君子蘭花芽をほのと雪の夜 鉄之介

波郷の句は、かつて愛唱したが、彼の切れ味の良いいリズムが早春の句を際立たせていて、特に好きであった。

立春の米こぼれをり葛西橋

波郷

早春や道の左右に潮満ちて

波郷

一句目では、米の白さといぼれる音が句から読みとれる。まさに視覚と聴覚の二つ、さらに、さらさらとした米の質感、つまり触覚さえも刺激するような句となつて、立春の時候を際立たせている。尚、波郷は戦後の十年余り江東区北砂町に住んでいた。葛西橋はその地にある。二句目。春の語源はハル―膨る―ということであるが、万象が勢いをもつて膨らむ様にあるようだ。「潮満ちて」の「て」止めが、勢いの永続性を暗示している。

手のような花芽が、重なった厚い葉の間から顔を出す。その姿の静謐さにもかかわらず、

内では大いなる力が春を開示すべく働いている、と感じてしまうのである。

数年前から草花を種から育てているのだが、春咲きの草花は、初秋に種をまく。秋にあつて春待つ心境なのだが、小さな種を手にとつた時、ああこの中に春があるのだと、ふと思つてしまうのである。

バス待ちて大路の春を疑わず

波郷

春待つ人の心境が、確信に至つた。それを波郷が「疑わず」と言い切つたのである。暦の上では春であつても、肌身には寒さがまだ未だ厳しい。そのような行きつ戻りつの氣象を経た後、「大路の春」を確信したのである。作者自身の生に対する確信、心のときめきをも句の中に読みとれる。

梅も好きだ。戸外の寒さにもかかわらず、梅を見たさに体がうずうずしてくる。加藤郁平著の『江戸徘徊歳時記』（平凡社刊）には「梅

見」を設けている。その中の一句。

亀戸まで鎧やうりを持たせて梅見かな

麦畝

亀戸には臥竜梅と呼ばれる名木があったのである。江戸には何ヶ所かに梅園があったが、花見ほど一般的ではなく、雅人、粹人、隠士が梅見に行ったとある。同書には『絵本江戸風俗往来』の一文が紹介されている。孫引きではあるが面白いので引用すると、「武家は馬上に金蒔絵の鞍置き、馬丁べつなうは身内の文繡いれずみをあらはし、白足袋にて先に走る」とある。江戸はやつぱりにぎやかだ。その時代の梅の句は、

梅が香にのつと日の出る山路かな
むめーりん一輪ほどのあたたかさ
んめがかや乞食の家も覗かるる
寝ぐるしき窓の細日や闇の梅

芭蕉
風雪
其角
乙州

一方現代の梅の句は

活けし梅一枝強く壁に触る
梅も一枝死者の仰臥の正しさよ

誓子
波郷

この二グループを比較してみると、やっぱり現代は神経が過敏なところがあるように感じる。言葉がとがっていませんか？ これだけて較べるのはちよつと危険ですが……。

冒頭で立春のことに少し触れたが、ここに春の六気節を書く（陰暦は概略日）

立春

陰暦 正月節
陽暦 二月四日

雨水

陰暦 正月申
陽暦 二月十九日

啓蟄けいちち

陰暦 二月節
陽暦 三月六日

春分

陰暦 二月申
陽暦 三月二十一日

清明

陰暦 三月節
陽暦 四月五日

穀雨 (陰曆 三月中
陽曆 四月二十一日)

日常よく使用されるのは、立春、啓蟄、春分などである。俳句を作っていると、季節に敏感になる。動植物では目前にして触発されるわけだが、時候となると曆に触発される場合がある。例えば季語の「冴え返る」や「日永」は現実の気象を体が感じ取るのだが、季節は曆上の区切りである。一年中で最も寒さを感じ、オーバーを欠かせない時に、立春なのである。ここらあたりの事情を新潮社刊の『俳諧歳時記』では「従って季題としての『立春』は、料峭たる寒気の中に近づいて来る春を感じとるその心持であろう。」と著し、角川書店の『俳句歳時記』では、「しかし曆によって立春の感情が整えられることは確かだ、寒気のなかに早くも一抹の春色を覚える。」と著している。どちらも含蓄のある言葉であるが、私達は曆と現実の二重の春を楽しんで

いるわけである。待つ心がすでに春を取り込んでいて、曆上の春もやはり春なのである。さて、最後に春の句を気ままに並べて見ますので楽しんで下さい。

寒明や妻の銚の小鈴鳴り

宵二

寒明けの街や雄牛が声押し出す

三鬼

大雨の次の日春となりにけり

雨城

病床の匂袋や浅き春

子規

春さむく海女にも問ふ渚かな

楸邨

春めきてものの果てなる空の色

蛇笏

冬 新年

浄土俳壇

負けること決まつてをりしカルタとり

七草粥好みし父の硯箱

病院の出口に止まる焼芋屋

燭ゆらぎ成道の絵図正面に

紅白の餅三宝に成道会

赤飯のお齋今日しも成道会

吉田ゆきゑ (江戸川区)

山田瑞邦 (神戸市)

古き歳時記繰ればはらりと冬の陽に

大根干し孫も手を借す冬日和

果実酒は我が家のカリン素敵です

千両万両開けば五エ門北叟笑む

丸き背にかつぎし熊手確かなり

冬ざれのベンチに烏打帽二つ

どっか少しづつ死んできて福寿草

寒紅やあさつてばかり見て生きる

潮騒をはるか遠くに野水仙

たぎる湯へ冬菜はらりと落としけり

山本美代子（姫路市）

大貫伸子（印旛郡）

蓮門俳子

内堀綾子（小平市）

山小屋の人詰め込みし去年今年
盲汁明りをつけて怒鳴られる

短日や鉢のかたちに土抜ける
去年今年開いたままの大辞林

ポケットに恐竜育つ初句会
境内のアパートに住み枇杷の花

拝んだらどきりと雪が落ちてきた
敗者にも降る雪熱き競技場

松本厚子（町田市）

長谷川 裕（目黒区）

近藤十四郎（本誌）

井口 栞（大田区）

霜月を急がず渡れ三瀬川

法螺響く冬將軍を引き連れて

駆け足で過ぎたし余生永観忌

佐藤雅子（上山市）

初日さす膝の痛さや護念経

修正会や朱き灯明ひとすじに

蓮門俳子

自販機のどすんと後ろ枯野原

日を得ては風の笑くぼの冬泉

金粉の雪降りつつむ常夜燈

児玉仁良（入間市）

●「J」ばずる

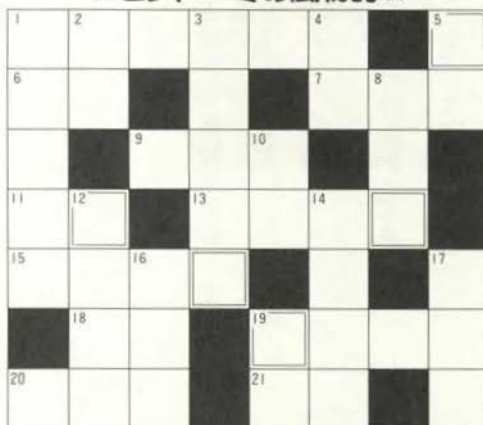
寒さも一段と厳しくなる二月。

より温かい食べ物が食べたくなる季節ですが、チョットその前にクロスワードでもいいかが。

タテ・ヨコのカギをたよりにマス埋めて、二重ワクの部分をつなぎ合わせると……。

答えがわかったら、「J」ばずる係までふるってご応募下さい。抽選で五名の方に記念品を差し上げます。二月末日必着で。

★ヒント・冬の風物詩★



〈タテのカギ〉

- ①おそば、うどんにサツとひと振り。
- ②小さい石。
- ③雑誌「文藝春秋」の創始者。
- ④この小さい果物、渋みはあるけど赤く熟すと美味しいね。
- ⑤中国の貨幣単位。
- ⑥昨年話題になった「失楽園」。女性主人公の名は？
- ⑦森の住人。出会っちゃったら寝たふりを。
- ⑧瀬戸内海西部の海賊。
- ⑨困りました。株価がまた…。
- ⑩東海道新幹線は「ひかり」と「こだま」。秋田新幹線は？
- ⑪昆虫の幼虫と成虫の間の状態。
- ⑫贅沢で派手なこと。

〈ヨコのカギ〉

- ①高山の山麓を徒歩で旅行すること。
- ②雨の多い時期。
- ③調味料。酒を原料に作ります。
- ④ヤクルト、〇〇〇の十連勝です！
- ⑤黒パンの原材料。〇〇麦。
- ⑥ブリッと歯ごたえ、小田原名産。
- ⑦初めての結婚。
- ⑧〇〇ものなので保管は冷蔵庫で。
- ⑨ザイルを通す登山用具。
- ⑩料理の付け合わせ。ゆず、かぼす、〇〇〇。
- ⑪釣った魚を入れる籠。

●J・FORUM（浄土の広場）

毎号、ご好評を頂いております。皆様のためのコーナー「J・FORUM（浄土の広場）」。俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でどんどん応募下さい。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内。
2 俳句・短歌・川柳など：四首まで。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見や感想など：適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

●新しい会員をご紹介下さい！

当会では、随時新会員を募集しております。お友だちやお知り合いの方々に、是非法然上人

讃仰会への入会、そして「浄土」講読をお勧め下さい。ご連絡いただければ、見本誌、パンフレットをお送りします。

また、ご紹介頂いた方と新しく入会された方には、記念品を進呈致します。

●会費ご納入のお願い

すでにお手元に、平成九年度会費納入の振り込み用紙をお送りしておりますが、まだ未納の方は早めにお振り込み下さいますようお願い致します。

●新規会員ご紹介（敬称略）

講読会員

東京 江戸川 富田重男

宮城 仙台 首藤卓也

茨城 取手 本願寺

山梨 富士吉田 西方寺

ご入会有り難うございました。



編集

後記

涅槃会や猫を探しに増上寺

岱潤

二月十五日は釈尊涅槃会であることは、衆知のことでありましょう。また増上寺の涅槃図に猫が描かれていることは、九十五年二月号の本誌で大室顧問が書いて下さいましたから、読者諸氏もご存じのことだと思っています。

十二支にも入れてもらえなかった猫が、増上寺涅槃図には描かれていることは、大して猫好きでない私でも何とも嬉しい気持ちになる事実です。どんな動物も分け隔てなく、仲間に入れてゆく佛祖の教えが感じられます。

涅槃会が近づけば涅槃図を掲げる、こうした年中行事を一つ一つこなしてゆくことは、今や寺の重要な仕事だといえます。年中行事として伝わる文化の伝承、こうしたことが一般の家庭ではまったくなくなりかけていることを、今年は正月にぜひぶんと経験しました。

お雑煮 お節料理はともかくも、屠蘇酒、三日とろろ、七草粥などといった食文化を続けている一般家庭は、まれな存在といえるでしょう。何とも悲しい事実です。

いよいよ今月、長野で冬期オリンピック大会が開催されます。スポーツ競技の勝ち負けはともかくも、国際交流を高める絶好のチャンスです。そんな時こそ、お互いの文化の違いを確認し、理解する時だと思ふのです。国籍、肌の色、宗教の違いを飛び越えて、お互いが仲間であることを認めあうことは、同時にその違いを尊重するところからしか生まれないと考えます。そのためにも先ず自分の文化を大事にしたいと思ふのです。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻二月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷—平成十年一月二十五日
発行—平成十年二月一日

発行人

編集人

印刷所—株式会社 シー・エー・イー

真野龍海
宮林昭彦

〒一〇五〇〇二二

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三八
振替〇〇一八〇八八二二八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上がり。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が続くようです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかに力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 41ℓV8 ガソリンターボエンジン搭載モデル(ディーゼルエンジン搭載モデルも用意) ●全長4970・全幅1820・全高1445(mm) ●エンジン V8 4130cc
TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ワット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席・助手席・リア3点式シートベルト ●一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローカル・ディラー・ディーラーへ。

スピードおさえ、いい運転。
シートベルトをしましょう。

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①

●ご協力をお願い。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社